様式7　授業改善プロジェクト

アクション・リサーチのまとめ

英語教員指導力向上研修

受講番号 18041　**学校名** 梼原高等学校　**氏名** 中山　明代

研究の背景

研究対象（学年、クラス等） 3年Ⅱコース　**生徒数** 20 名

科目名 Writing　**単位数（授業時数）** 2 時間　**使用教科書名** EXCEED English Writing

クラスの様子・特徴

進学クラスであるが、英語に対して苦手意識を持っている生徒が多い。ただし、指示されたことはきちんとやる真面目さを持ち、授業態度は良い。アンケート結果等で、英語がわかりたいがわからなくて苦労している生徒が多いのではないかと感じた。

問題の確定

多くの生徒が継続的学習や地道な努力を要するタスクに取り組むのが苦手であり、中学既習内容が定着していないものも多い。

予備調査

A 授業の観察	B 生徒による授業評価	C 学力データ
考えるのに楽しい問題などはそのように取り組んでくれていたが、それでも理解に苦しんでいる生徒もいた。定期試験前に授業の復習として練習問題に取り組ませたが、自身の力で解くことができる生徒がほとんどいなかった。	1学期の終わり（7月）に取ったアンケートによると、ワークシートはわかりやすいという回答が得られたが、授業では解説できなかったワークブックの問題、また英作文課題には苦労している様子がうかがえた。板書をきれいに、字を大きくという意見も多かった。	4月課題確認テスト平均53.7点・5月望月語彙サイズテスト（レベル1）25～30問正解85%（全20名中）・5月末中間試験平均64.3点・7月期末試験平均60点。2回の定期試験においては平均点以上のものは全体の60%であった。

リサーチ・クエスチョン

中学既習内容がまだ十分に定着していないクラスの生徒達が、やさしい英語で自己表現できるにはどうしたらよいか。中学既習内容も含め、基礎単語・構文力がつくにはどうしたらよいか。

仮説・実践・検証

仮説1 ⇒	実践1 ⇒	検証1
比較的簡単な語彙を使った英文作りを繰り返し練習させることで、構文を理解し使えるようになるだろう。	まずは、ワークシートをわかりやすい例文や練習問題を増やしたものに改善した。しかしタスクが多すぎて、進度に問題があり、問題数を厳選したものに変更した。そこでは1つのテーマに対して約20の練習問題に取り組ませた。	練習量と授業進度との狭間で悩み、結局は繰り返し練習させるところまでいかなかった。授業では適度な練習量と解説の時間を取ることができたが、それだけでは定着しない生徒達も多かった。どうやってタスクを課せばいいのか、時間を捻出できるか、方法が見つからず苦労した。実際、生徒達は仮説3での英作文課題に対し、十分すぎるほどの量の多さを感じていたようである。
仮説2 ⇒	**実践2 ⇒**	**検証2**
単語だけをただ覚えるのではなく、文を構成するものとしてとらえ、効果的な語彙テストを行うことで、基本単語の習得及び語順も理解できるようになるだろう。	1学期まで単語データベース3000を使い、そこから毎時単語10問小テストを実施した。（つづり5問・意味5問）2学期より、覚えたい語を5つに絞り、さらにターゲットセンテンスとして出題をする小テストを実施し2学期間続けた。	1学期間の単語小テストでは、その場だけのものに終わり語彙力定着には結びついていないことがわかった。2学期より取り組んだ英文テストにおいては、生徒達はかなり抵抗感を覚えていた。徐々に慣れてはいったが、やはり彼らの意識を変えることはできなかった。しかし、定期試験での単語力は58%から61%に少し上昇し、単語力が少しは上がったと感じた生徒も多く、負荷をかけたこの語彙テストも少しは効果があったようだ。
仮説3 ⇒	**実践3 ⇒**	**検証3**
比較的やさしい英語を使い、身近なトピックについて短い英作文に取り組ませることにより、自己表現力がつき始めるだろう。	2学期より、毎課ごとの重要表現を使った4文程度の英作文を課題とした。新たに評価シートを作り、生徒への評価・アドバイス等を明確にした。また、トピックも身近な話題に基づいた、より役立ちかつ楽しいものを選び、文章も少しまとまりのあるものを書くよう指導した。その他の工夫として、課題の中から優秀作品を選び、披露した。	毎週の課題に苦労しながらも、全員真面目に取り組んでいた。ただし、語順がバラバラな文章を書いてくる生徒も多く、英語力が目に見えて上がっているとは言えなかった。しかし、英語の苦手な生徒も何とか表現しようという姿勢は見られた。アンケートでは「少しは英語で自己表現ができるようになったと感じた」という生徒が半数いたので、少しは効果があったと思う。

研究の成果

生徒を見ていると、宿題や課題及び進度の速さに苦労している様子がうかがえた。実際、課題もテストも「わからない。できない」という声もよく聞かれた。しかし、続けることで、少数だが「英文を書きやすくなった」という声もあり良かったと思う。そう思わないという生徒たちも、習っていない単語を使ったり、より工夫されたアイディアをもとに文章を作るなど前向きな姿勢が見られた。そのような生徒達にもっと英文で表現できる力をつけさせてあげたいと強く思ったが、彼らへの手立ても、効果を得られるための期間も十分ではなかったと思う。

今後の授業改善の課題

最初も肝心であり、高校一年生の英語でしっかり中学既習内容を定着させ、英語の大量シャワーを浴びせる必要があると思う。また、単にシラバスを「教科書を使用し、時系列で授業内容を提示する」だけのものとせず、対象生徒に合わせた目標と進度を考えていくべきである。そのためにはこのARで学んだ「できることからやる」という目標設定と授業改善方法を生かしていきたいと思う。

リサーチについての問合せ先：　職場電話　0889-65-0181　電子メール　akiyo_nakayama@kt2.kochinet.ed.jp